

建築主：新日本製鐵株式會社君津製鐵所
 設計：株式会社竹中工務店
 施工：株式会社竹中工務店
 所在地：木更津市築地1番1

大地に浮いたスチール・インゴット

新日本製鐵君津製鐵所本館



鉄の輝線スペクトルパターンをオーバーラップさせたファサード※

1200haに広がる君津製鐵所は、高炉3基を有し、同社3主力製鐵所のひとつである。首都東京に近いこともあって、国内外から多くの来訪者を受け、対外的な窓になっている。その新しい顔として、かつての製鐵所管理・迎賓・PR機能を集約して建てられたのが、延べ床面積約1.3万㎡の新本館（地上4階、地下1階）である。

建物全体が巨大な箱型の押出し材インゴットの形をしており、力強い。他方、鉄を同定する輝線スペクトルパターンをデザインの隅々まで浸透させ、繊細で美しい。ファサードや内装仕上げのパターンから敷地内横断歩道のパターンまで輝線スペクトルを採用する徹底ぶりだ。

同社のベーシックな製品を、遊び心を込めた想定外の使い方をすることで、個性的な空間を演出することに成功している。主要構造である鋼管では、継ぎ目の溶接痕をわざと見せている。VIP用エントランスを入ると、通常足場材などに用いられるパネルの壁に出迎えられる。応接室に至る廊下は、銀色に輝く印象的な空間だ。



押出し材インゴットのフォルム

天井・壁とも表面処理の異なる2種の下地材を仕上げ材に大胆に用い、ランダムに蛍光灯が配されている。

新日鉄の製品カタログと鉄の輝線スペクトルを片手に、建築デザインの随所に宿る鉄たちを探してみたら丸一日楽しめそうだ。

製鐵業には溶鋳炉の中で煮えたぎる、どちらかといえば荒々しいイメージがある。この建物は、そんなイメージを一新し、鉄のおしゃれな一面を見せてくれる半面、沿岸重工業のパワーで日本が単純に勢いづいた時代が過ぎ去ったことを体現しているかのようだ。（岡部明子）



2種類のLGS素地を積層し、下地材を仕上げ材に転用した通路

（※撮影/小川泰祐）